

大学図書館に期待するもの

寺門 臨太郎

筑波大学 芸術系

大学図書館に期待するもの

●講義の構成

1. 美術史(学) Art History と美術の歴史 History of Art の方法
2. 美術史研究者がつけられる環境
3. 大学図書館に期待するもの
⇒ 「もの」としての資料の蓄積と発信

●キーワード

- ・ 「もの」 material and/or tangible object(s)
- ・ 至高性／主体性 sovereignty

1. 美術史(学) Art History と美術の歴史 History of Art の方法

(1) 「美術」という制度と「作品」

美術館という場で（制度／枠組みのなかで）目にする展示物

→ わたしたちの文化が「美術(作品)／アート」と呼び、
価値づけたもの

→ 元来「美術(作品)」は美的な愉しみのために
つくられたとはかぎらない

→ 後世の価値観で「美的」な機能をあとづけし
文化や素材のちがいを超えた あらたな文脈が
あたえられたものが「美術(作品)」(?)

1. 美術史(学) Art History と美術の歴史 History of Art の方法

(1) 「美術」という制度と「作品」

美術史 art history というディシプリン

絵画, 彫刻 (+ 建築, 工芸) = 「美術 art」

→ 個々の「美術(作品)」を「歴史」という
時間軸にのせて体系化する研究

→ 「美術」をめぐる 物語の批判と再構築
ストーリー化

→ 美術の歴史 History of Art として記述

(2) 「傑作」への投資

美術館という場で目にする「傑作」

「傑作」というイメージ ≠ 美術作品

→ 「傑作」と呼ばれるようになるよりも前の
「美術(作品)」は見えていない(?)

→ 『「傑作」というイメージ』を批判的に見る
B・クルーガー
《あなたは傑作の神威に投資している》(1982)

→ 「傑作たるもの」をめぐる
あらたなストーリーの再構成

1. 美術史(学) Art History と美術の歴史 History of Art の方法

(3) 「もの」としての美術作品の至高性,
あるいは「もの」が主張する主体性

「もの」の至高性ないし主体性 sovereignty への意識

→ 「もの」そのものの豊かさへの気づき

→ 「もの」そのものの持続可能なちからへの共感／批判

●美術作品は

「常に歴史家がそれについて問うているところのものにしたがって、それ独自の特殊な真理やメッセージを明らかにする」。

(ハンス・ベルティング, 元木幸一訳『美術史の終焉?』
勁草書房 1991年 [原著: 1983; 1995²])

(4) 米国ウィリアムズ・カレッジの教育研究組織

1793年創設

マサチューセッツ州ウィリアムズタウン

全米リベラル・アーツ・カレッジでトップ・ランキング

→ 輩出した美術史研究者は米国屈指

→ 豊かなコレクションをもつ大学附属美術館

・ Williams College Museum of Art

徒歩圏に Clark Art Institute

(4) 米国ウィリアムズ・カレッジの教育研究組織

Williams College Museum of Art

- 美術史専攻の教員， 院生， 学部生のほか隣接諸領域の教員や学生が研究・教育に利用
- 「もの」 に即した研究方法の習得
- 「もの」 としての美術作品の熟覧方法の獲得
- 所蔵作品・資料を活用した展示実習
 - 「もの」 を使った美術史 Art History の実践
 - 「もの」 を使った美術の歴史 History of Art のストーリー化

(4) 米国ウィリアムズ・カレッジの教育研究組織

Sterling and Francine Clark Art Institute

- 中世末期から近代のヨーロッパおよびアメリカ美術
- 年間入館者およそ20万人
- 蔵書数豊かな図書室（1962年創設） = 275,000冊以上
- 閲覧室にはウィリアムズ・カレッジの院生専用机
- 国内外からのvisiting scholarのための助成金制度

2. 美術史研究者がつくられる環境

(1) ふたつの美術史

美術史 vs 美術史 = 大学 vs 美術館
(組織 [職場] 環境のちがいによる対立?)

- Charles W. Haxthausen (ed.), *The Two Art Histories: The Museum and the University*, Williamstown (Mass.): Sterling and Francine Clark Art Institute, 2002.
- 寺門臨太郎・赤間和美 (編)
『シンポジウム「ミュージアムとしての大学キャンパス」』
筑波大学芸術系・五十殿利治 [科研報告書], 2013年.

2. 美術史研究者がつけられる環境

(2) 愛知芸術文化センター

1992年開館の複合施設＝美術館＋劇場＋図書館

●愛知県美術館

- ・ 1955年開館の前身館による玉石混淆の収集を継承
- ・ 1990年代の日本で他に類をみない予算規模
- ・ 近代美術史の教科書を捲るようなコレクションを形成しようとした → 質の高い作品群の形成

●愛知県文化情報センター・アートライブラリー

- ・ 美術，音楽，演劇の専門図書館
- ・ パリの美術商旧蔵の図書資料
「タリカ・コレクション」22,000余冊
→ 質量ともに国内最高水準のリソース

3. 大学図書館に期待するもの

(1) 知のショールームとしての大学ミュージアムと
オーソライズされたミュージアム組織をもたない
大学の知

- ・ 国立の総合大学で唯一，大学ミュージアムなし
- ・ 国立の総合大学で唯一，芸術（art & design）に
特化した研究教育組織と専門図書館あり

→ 独自の知のありよう

本来的な「自由学芸 liberal arts」のありよう
いわゆる「論文」とは異なる仕方での研究成果発信

→ 「美術(作品)」の至高性ないし主体性を
活かした知のショールーム化

3. 大学図書館に期待するもの

(2) (机上の) M L A連携議論

- 学外の学術情報の収集から
学内の学術情報の蓄積と発信へ
- 法による規定の脆弱さ？
→ 日本の大学図書館は
設置主体としての大学の一個の傘下組織か
- 「デジタル」アーカイブの非アーカイブ性
- 「もの」(図書, 古書籍, 手稿本, 写本等) としての資料の必要性
→ デジタル資料 過信への警鐘
(あるいはデジタル化された資料)

3. 大学図書館に期待するもの

(3) 筑波大学体芸図書館で「もの」と図書館の至高性
あるいは主体性を問う

●専門図書館の強みを活かした情報の蓄積と発信

にもかかわらず

雑誌購入費（各研究組織への運営費等交付金で定期購読）の
削減につぐ削減

→ 作品購入費や展覧会開催経費等のない
地方美術館の実績を下回る購読タイトル数

→ 学術資源／資料の枯渇

→ 研究力／教育力の低下に直結

3. 大学図書館に期待するもの

(3) 筑波大学体芸図書館で「もの」と図書館の至高性
あるいは主体性を問う

●専門図書館の強みを活かした情報の蓄積と発信

- ・ラーニングコモンズ環境整備
「ユーリカ」
芸術専門学群（学士課程）や大学院博士前・後期課程の
学生によるインスタレーション
- ・知がうまれる環境を象徴する「もの」の展示
「もの」の至高性や主体性に期待する学術資料
としての美術作品の公開
- ・展覧会ポスター・コレクションと蔵書(図録)を
リンクさせたテーマ展示